月刊 利根日石新聞 第000158号
2009年11月1日創刊 令和4年11月号
発行 利根日石株式会社 TEL0278-24-1635
本社販売管理課 FAX0278-23-7980

今年も残すところ一ヵ月と少しになってしまいました。コロナにインフルエンザ、会いたくても会えない そんな事を考えたり、心配な事ばかりです。みなさんはどんな一年でしたでしょうか 幸せですか

今年3月に国際連合は「世界幸福度ランキング2021年版」を発表しました。これは各国の人に七つの指標をもとに、自分の幸福度を評価してもらうもので今年で9回目となります。5年連続の一位はフィンランドで北ヨーロッパのバルト海沿岸に位置していて人口密度は低い国でおよそ550万人の人々が主にフィンランド南部中央部に居住しています。水と森が豊かな国で国連122ヵ国でおこなった水質調査でフィンランドは第一位に輝き フィンランドの場合 自分らしく生き、ゆとりのある生活をしているようです。二位はデンマーク三位は、スイスでした。日本は五十六位という結果でした。すいぶん低くて日本は忙しいのかなあ〜

フィンランドの名物料理は、馴染みのある食用肉はトナカイの肉でヘルシーで栄養が高いトナカイの肉は寒いフィンランドで大切な肉です。シチューとして調理されたり、サーモンを入れたスープ、野菜と牛乳を一緒に煮込んだ伝統料理で家庭の味として親しまれているそうです。

「秋の七草」ある本から

皆さんは秋の七草をご存じでしょうか。春の七草は、それを七草粥にして無病息災を願うのに対し、秋の七草は美しさを観賞して楽しむものと言われます。奈良時代末期に成立したとされる『万葉集』は、日本に現存する最古の和歌集です。歌人の山上憶良はその中で「秋の七草」について二首詠んでいます。

秋の野に咲きたる花を指折り かき数ふれば 七草の花
萩の花 尾花 葛花 撫子の花 女郎花 また藤袴 朝顔の花

二首目は七草を表し萩 尾花(薄のこと)、葛、撫子、女郎花(おみなえし)、藤袴(ふじばかま)、最後の朝顔(あさがお)の花は諸説ありますが、現在では桔梗を指すと言われています。『万葉集』に登場する植物は「万葉植物」といわれますが、最も多く詠まれているが、秋の七草でもある「萩」で百四首あまりに登場しています。一二〇〇年以上前の日本人は季節の植物を歌に詠み、美しさを楽しみました。私達も時に公園や河原に咲く草花を見つけたり、紅葉の美しさを観賞したりして、心をリフレッシュさせ、張り切って仕事に臨みましょう。

紅葉もゆっくりと見る間もなく今年も残り2ヵ月を切りました。休みの日に紅葉がきれいな所、父と母の所に行って無事に年を迎えられるよう、心をリフレッシュしに行ってこようかな

秋の夜長に、この一冊

10月27日～11月9日は「読書週間」です。 円安、物価高、ロシアのウクライナ侵攻、新興宗教と政治家との癒着、テレビをつければ ため息の出るニュースばかり。秋の夜長にたまにはテレビを消して、本のページを繰ってみてはいかがでしょう？

今回は独断と偏見で今年読んだ本の中で一番印象に残った1冊をご紹介します。

「同志少女よ 敵を撃て」

（逢坂冬馬著、早川書房）

昨年の11月に出版。 第11回アガサ・クリスティ賞の選考会で、史上初めてとなる"選考員全員が満点をつける"という快挙で同賞を受賞したことで話題になりました。その後、全国の書店員が選ぶ「本屋大賞」も受賞、第166回直木賞にノミネートされるも受賞はならず、その後も重版を重ね2022年を代表するベストセラーとなりました。ご存知の方や、既に読まれた方もいらっしゃるかも知れません。

私がこの本を手にしたのは今年2月のロシアによるウクライナ侵攻がきっかけでした。テレビのニュースではウクライナで逃げ惑う人々や、ロシアのミサイルによって破壊されるマンションを映し出し、新聞は各地の被害状況や難民を受け入れる周辺国の状況を報じましたが、ロシアとウクライナの間には今までどんな歴史があったのか？そもそもロシアとは、ウクライナとは、どんな国なのか？実は何も分かっていないという事をニュースや新聞報道に接して改めて思い知り、ニュースや新聞ではなく、本を読んでみようとした時に、話題になっていたこの本を知りました。

舞台は第二次世界大戦、独ソ戦さ中のモスクワ近郊の村で母親と暮らしていた主人公、セラフィマは、ある日、進軍してきたドイツ兵に家族と村人を殺されてしまいます。間一髪で彼女を救ったのはソ連赤軍の女性兵士であり、女性狙撃手養生学校の教官長も務めるイリーナ。彼女はセラフィマを、ウクライナやカザフスタンから集めた女性たちと共に狙撃手として訓練し、人類史上最も過酷な市街戦として知られるスターリングラードの攻防戦を始め、激戦地を共に潜り抜けます。戦争の狂気、殺りくの衝動に駆られる自らへの恐れ、国家権力の理不尽、家族を殺したドイツ軍だけでなく家族の思い出を踏みにじったイリーナに対しても憎悪を抱くセラフィマが悩み、傷付き、どん底の地獄を潜り抜けた先に辿り着いた境地とは。

著者の逢坂冬馬氏は現在37才。何とこれが作家としてのデビュー作。新人とは思えない筆力は特に戦場シーンが圧巻です。残酷な惨状がありありと脳裏に浮かぶ描写は作者の暴力に対する特別な思いによるもののようです。曰く、「暴力が嫌いで戦争も嫌いなんです。否定する根拠を持つ為に、小説で個々の兵士の内面に迫る形で暴力を描きたかった」暴力ともう1つモチーフになっているのが女性、特に戦場における女性の姿です。ソ連が実際に第二次世界大戦中に登用した女性狙撃手が主人公として描かれています。彼女たちが戦地で何を見て、何を考え、どんな言動をしていたか？殆どの場合、男性の物語として描かれる戦争を、女性の主人公で描き、そこにリアリティを生ませたのは、作者が本作を作るきっかけとなった「戦争は女の顔をしていない」（ノーベル文学賞を受賞したジャーナリスト、スヴェトラーナ・アレクシェーヴィチが、独ソ戦に関わった女性500人を対象に行なったインタビュー集、1984年発表）の存在が大きかったようです。

500ページ近い大作ですが、一気に（と言っても数日かかりましたが）読める作品です。秋の夜長にいかがでしょうか？